

私は先日、ぐんま教育文化フォーラムの会員の針谷順子先生が主宰する「源氏物語に親しむ会」の講座に参加しました。講師の針谷先生は、私が中央高校の生徒だった27年前に国語の先生だった方です。

講座は「源氏物語の女性達」をテーマにした31回シリーズの最終回で、6月10日に前橋市の「前橋プラザ元気21」で開催されました。先生は物語に登場する姫君たちの想いや身の処し方、謎めいた中断のような形で終わる「夢浮橋」について、独自の視点による解説をされました。

卒業生通信『ざ・羅針』

この講座に参加するきっかけとなったのは『ざ・羅針』という高校の卒業生通信です。編集者は針谷先生でした。この通信は、先生方のエールの言葉や、一部の卒業生の近況が載っていて、その後たびたび読み返していました。高校当時の私は不真面目な生徒で、日常的に遅刻し、苦手な科目の授業は頻繁にさぼっていました。勉強についていけず、窓から見える関越道をぼんやり眺めていたことを覚えています。当時は諦めていましたが、その後10年以上経ってから、ちゃんと勉強すればよかったと後悔しました。

卒業生通信は引っ越しや大掃除のたびにひょっこり出てきて、私は何度も読むうちにもう一度授業を受けたいと考えるようになりました。社会人経験を積むうちに、当時の先生方の魅力が分かるようになってきましたし、仕事をする中で勉強の面白さを理解できるようになったのだと思います。この願いは、インターネットのおかげで意外とあっさり叶ってしまいました。Googleで色々な先生の名前を検索したところ、針谷先生の講座を見つけたのです。

「源氏物語に親しむ会」

久しぶりにお会いした先生は、お洒落で爽やか、あの頃と変わらないどころか、ますます活気を増し、古典の世界を追求してきた自信や参加者と



『源氏物語』を共有できる喜びにあふれていました。難しい古語も先生の手にかかれば、身近な言葉となり、千年昔の姫君の嘆きも「本当にそうよねえ」と皆でしみじみ相槌を打ってしてしまうのはとても不思議なことでした。参加者の中には熱心に質問する方、物語を吟じる方もいて、そのパワーにも圧倒されました。当日配布されたアンケート結果には「充実した日々だった」「ぜひもう一度開催してほしい」という声が多く寄せられていました。

勉強を継続するには

この日、「何歳になっても学び続けよう」「何かを始めるのに遅すぎることはない」という確信を新たにして家に帰りました。私自身は、大学で社会学を学んだ後、20代は主に放送大学で、30代以降は、Courseraという海外大学の授業を公開するウェブサイトではビジネス関連の科目を取りましたが、継続が大きな課題でした。この課題についても今回の講座でヒントを得ることができたように思います。

針谷先生は研究対象を机上の物として終わらせず、実生活（経験）を通して考え続けることが大切なのだと話しました。先生がそれを実践しているからこそ、『源氏物語』の面白さが私たちに身近なものとして伝わったのだと思います。そして「学び」と「生活」の関係の中で新たな発見が生まれることで、結果的に好奇心を失うことなく、自然な形で生涯学習が可能になるのかもしれない。

今回は、長い間ご連絡を差し上げなかったにも関わらず温かく迎えてくださった針谷先生と、再会のチャンス与えてくださったぐんま教育文化フォーラムに心よりお礼申し上げます。（了）

卒業生通信 『ざ・羅針』より 「窓」

針谷順子

今年の五月、ある県の高
校で男子生徒が教室の窓
から飛び降りた。足の骨を

折るなど全治数ヶ月のけがをしたが、骨折はほぼ
直ったようだ。しかし心に受けた傷ははまだ直ら
ず入院中だ。男子トイレで強要された性的嫌がら
せが彼には耐えがたいものだったらしい。

嫌がらせをした生徒にはほとんど加害者意識
はないようだ。ちょっとからかい半分にやったこ
とで、そんなことをいちいち気にされて窓から飛
び降りられたらたまったものではない、こちら
の方が迷惑、そんな感じだそうだ。

いじめは最初は面白半分の気持ちから始まる
ことが多い。それが次第にエスカレートする。集
団の力は恐ろしい。

嫌がらせをした子は、自分の希望する会社に入
って、社会人として元気に仕事をしていくかもし
れない。希望する大学に合格して、充実した学生
生活を満喫するかもしれない。しかし、窓から飛
び降りた子の心の傷は、本人も気付かぬ奥深いと
ころに存在し続け、思わぬ時に、再び生命を脅か
し、社会生活も不可能な状態に本人を陥れるか
もしれない。その傷は、いつ、どこで癒されるのか。

生徒同士の生の人間関係が教師に見えてくる
のは、ほとんど末期的症状になってからと思っ
てよい。いや、そのような状況になっても教師には
わからないことが多いのだ。

教室の窓は何のためにあるのか。

学校は何のためにあるのか。

教師だからこそ、生徒同士の本当の関係が見え
にくいと言うことがあるだろう。しかし私たちは
その見えにくいものを見ようと努力し続けなけ
ればならないと思っている。教室の窓は、生徒が
飛び降りるためにあるのではないから。飛び降り
ようと思う生徒を一人でも出してはいけないか
ら。



《編集部より》

今回、「若者のひろば」に寄稿して下さった
内山千晶さんと当フォーラムとのご縁は、一本
の電話が最初でした。本文にあるように、ネッ
ト上で見つけた針谷順子さんに関する記事をた
よりに、内山さんが当フォーラムに電話連絡を
くださったのです。

これをきっかけに、針谷さんの「源氏物語に
親しむ会」の講座に内山さんが参加することと
なり、久々の再会が実現しました。まさに源氏
物語が人と人とを結びつける「縁(えにし)」と
なり、「紫のゆかり」を地で行くような展開に当
フォーラムも少し関わることができました。

日本の学校には「学級通信」などを教師が発
行する文化があります。学校からの連絡事項や
子どもの様子を綴った内容は、保護者にも読ま
れ大切に保管されることも多いものです。デジ
タル化が進み様々な情報が全員に瞬時に配信で
きるようになった現在でも、このような「学級
通信」が教師と子どもや保護者を結びつけるも
のとして至る所で発行され続けています。

「ざ・羅針」は、卒業半年後に卒業生のもと
に届けられた通信ですが、内山さんのようにこ
とある毎に読み返され、人生の羅針盤として未
来を指し示しているようです。この「ざ・羅
針」で、針谷さんは「学校は何のためにあるの
か」と自らの仕事を振り返り、厳しく問い続け
ています。ともすると一方通行になりがちな教
育現場で、教師の学ぶ姿勢・問い続ける姿勢こ
そが子どもたちの未来を切り拓く糸口になるの
ではないでしょうか。

コロナ禍を境に、増加するいじめ・不登校・
自殺・不安・格差・貧困・犯罪などの社会の諸
課題が一気に学校にも押し寄せて来ています。
それらの解決のために、学校が持つ機能が充分
ではないことに気づきながらも学校に頼らざる
を得ない多くの人の心情があり、それに無理に
でも応えようと苦しむ教師の姿があります。

改めて、学校は何のためにあるのかを、社会
全体が自分自身の問題として問い直すときに来
ているのかもしれない。